

高齢者の色彩感情の実態（第5報）－被服色彩嗜好の多変量解析－
 東京家政学院短大 今井弥生 ○井澤尚子 文化女大 飯塚弘子
 北海道女短大 石垣和子

目的 日本はいま、国際化、情報化、高齢化社会を迎え、人びとをとりまく衣食住生活環境が急速に変化しつつある。そこで色彩・意匠学部会では昨年引き続き、未知な分野が多い高齢者の色彩感情について全国的に実態調査を実施した。今回は被服の感性表現に適切な色彩の好悪、性別、年齢、地域による特性、イメージ構造を明らかにすることによって、老年期のころよい被服色彩設計、ライフ・スタイルの選定感情を考察する。第5報・数量化Ⅲ類、第6報・主成分分析、第7報・系統色名による解析を試みた。

方法 1) 対象 1535名（フェイス・シート第6報と同様） 2) 調査時期 1988年9月1～30日、10～15時 3) 手続 質問紙法、面接調査、JIS色票80色、個体14、カテゴリー：〔地域〕①・東北・北海道，②・関東，③・東京，④・関西、〔性別〕①・男，②・女、〔年齢〕①・65～74歳；②・75歳以上、4) 分析は数量化Ⅲ類。

結果 数量化Ⅲ類の分析によると、カテゴリーの配置からⅠ軸，Ⅱ軸では東京の男，女は老年前期、後期とも++、東北・北海道，関東は--、関西は+-の位置に分かれ、年齢、性別よりも地域に対応している。個体からはⅠ軸，Ⅱ軸で+-洗練された，ころよい，好きな，あたたかい。-+に明るい，若々しい。--に地味な，女性的なとなり、Ⅰ軸，Ⅲ軸では++に地味な，+-に女性的なが全く離れた位置となる。

いわゆる老年期の被服の色彩は、性差が強く、そして年齢を意識し地味で保守的な反面、若さと明るさを求める傾向にあり、多くの要因に反応していることがわかった。